慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	制御される自然 : クライストの戯曲『ヘルマンの戦い』におけるトゥスネルダの熊について
Sub Title	Die kontrollierte Natur. : zu Thusneldas Bärin in Kleists Drama ,,Die Herrmannsschlacht"
Author	橘, 宏亮(Tachibana, Hirosuke)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2021
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.121, No.1 (2021. 12) ,p.64- 79
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	識名章喜教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01210001-0064

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

制御される自然
――クライストの戯曲『ヘルマンの戦い』におけるトゥスネルダの熊について

橘　宏亮

I　文明による自然の制御――ローマ人とゲルマン人

ハインリヒ・フォン・クライストの戯曲『ヘルマンの戦い』が書き上げられたのは1808年後半であるが、[1]その成立は当時の政治的・歴史的背景と深く結びついている。1809年4月に対仏解放戦争に踏み切ることになるオーストリア政府はこれと前後して大規模なプロパガンダ戦を展開する。民衆による自発的な武装蜂起を期待していたのである。クライストによる一連のプロパガンダ作品が成立したのもこの時期であり、彼がオーストリア政府公認のプロパガンダ作家であると自覚していたという点も研究によってすでに明らかになっている。[2]外敵からの祖国解放、民衆武装蜂起、プロパガンダなどといった問題を扱う戯曲『ヘルマンの戦い』もこうした歴史的背景とのつながりをはっきりと示すものであり、また、作品内のローマ人をナポレオン率いるフランス人として、ゲルマン人を、フランス人に抵抗するドイツ人として読み解くことも可能である。[3]その題名が示す通り、作品の素材となっているのは、紀元9年、トイトブルクの森において野蛮なゲルマン人達を率いてローマ正規軍を打ち破った族長ヘルマンである。ヘルマンは、ルターと並び同時代の反フランス的なプロパガンダにたびたび登場する形象であるが、これによって暗示されるのは、文明対野蛮というすでにタキトゥスの『ゲルマニア』においても強調されていた対立の構図である。文明化により自然から遠ざかり堕落してしまったローマ人に対して、野蛮であるからこそ素朴で自然なゲルマン人という構図がそのままフランス人とドイツ人との差異として適用されるのだ。[4]この金髪碧眼の野蛮人というトポスは、クライストにおいても明ら

かに意識されている。例えばヘルマンは、ローマ人に対する戦いにおいてゲルマン人が勝利するのはほぼ不可能であると考えているが、これについて他の族長達に対して次のように述べる。

> 諸君、どうやってヴァールス［ローマ軍総司令官］の軍隊と張り合うつもりなのだ――整えられた隊形でもって、どんな場所でも才気煥発に戦うあの部隊と、森［Waldungen］の中から群れ集まった一団を率いてどう張り合おうというのだ。祖国を護るためにそなたらは何をもっているのか、いってみるがよい。むき出しの胸と朝星棒だけではないか。しかしやつらは青銅の武器で武装し、あらゆる地方で身に付けてきた戦の技をすべて駆使してくるのだ。だめだ、諸君。熊がすらりとしたライオンと戦って必ず負けるように、諸君も野戦［Feldschlacht］では、このローマ人達に確実に敗れる。[5]

文明が進んだローマ軍は技術的に洗練されているが、われわれゲルマン人はどうか。いまだ野蛮人の域を出ていないではないか。文明対野蛮という対立の構図はこの発言にはっきりと読み取ることができる。加えて、ここで言及される森と野という二つの地形は、正規的な野戦と非正規的なゲリラ戦という対照的な二つの戦闘様式を暗示するものでもある。1808年5月、武装蜂起したスペインの民衆によってフランスの占領軍が大いに苦しめられるという事態が発生してからというもの、グナイゼナウやクラウゼヴィッツといったプロイセンの戦争理論化達のパルチザンに対する関心は高まるばかりであった。クライストの戯曲はこうした戦争理論上の考察に詩的な表現を与えるものでもあったのだ。[6]民衆武装蜂起の問題についてはのちほど再び触れることになる。

文明化されたローマ人というイメージは、まず彼らが用いる欺瞞的な策略に表れる。ゲルマン人の二大勢力、ヒェルスカ族のヘルマンとスウェーヴェ族のマルボト双方に言い寄り、つまり双方ともに騙して、ゲルマン人を分裂させながら、最終的には全ゲルマニアをものにしようというのが彼らの戦略である。しかしまさにこうした狡猾で欺瞞的な戦略・策略という点でヘルマンはさらにその上をいく。敵であるローマ人に対しては愚かで無害な野蛮人を装いながら相手を油断させ、裏では密かにマルボトとの共闘を画策する。また民衆達の武装蜂起を促すべくプロパガンダも自ら積極的に展開し、その際、情報操作も厭わない。こうした

欺瞞・策略を駆使することによってヘルマンは最終的にローマ人を打ち破る。したがって、クライストにおいては、理性的だが本来の自然を失い堕落したローマ人に対して、愚かで素朴だが実直かつ自然なゲルマン人、すなわちタキトゥス以来の金髪碧眼の野蛮人という、同時代のプロパガンダ作家達によって頻繁に援用されたステレオタイプは無効となる。[7]だからこそ、ヘルマンの策略を知ったローマ軍総司令官ヴァールスも次のように嘆くのである。「ああ、ヘルマン！ヘルマン！金髪と碧眼を持っていながら、カルタゴ人のように、これほどまでに信用ならぬなどということがありえるのか。」（II, 531）

本稿において特に注目したいのは、この文明化のイメージが、クライストにおいてはさらに、自然を技術によって支配しようとする意志と結びついているという点である。分かりやすい例がヘルマンとその妻トゥスネルダとの会話において登場する。ヘルマンは、戦争において自らが所有するすべての財産を擲たねばならないという信念のもと行動する。[8]自らの家に属する息子たちや妻も例外ではない。ゲルマニアの覇権をめぐってライバル関係にあったマルボトを共闘へと引き込むために、息子たちを人質として差し出すし、またローマ人使節ヴェンティディウスを油断させるための作戦には妻も投入する。トゥスネルダはヴェンティディウスを歓待しなければならない。相手を騙すということで気乗りがしないとは言いつつも、ヴェンティディウスの甘言に対して彼女自身、満更でもないといった様子である。この二人が戯れているとき、トゥスネルダの愛の印が欲しいと言い出したヴェンティディウスは、一瞬のすきをついて彼女の金髪の一部を切り取り持ち去ってしまう。自分への恋心が高じてこのような無礼をはたらいたのだと己惚れるトゥスネルダに対してヘルマンは、ローマ人によって頭髪を切り取られた上に、道具を用いて歯まで抜かれたゲルマン人女性の話を持ち出す。ローマ人はゲルマン人の頭髪や歯を何に使うのか。ヘルマンは次のように説明する。「彼らは自分の汚い髪を切り取り、われわれの乾いたやつを刈りあがった頭にかけるのだ！自分の黒い歯を抜いて、開いた穴にわれわれの白いやつをうめ込むのだ！」（II, 487）元から醜いか、あるいは時間の経過によって醜くなってしまう身体を、技術を用いて、自然に反する形で美しくしようとするこうした試みは、自然を制御しようとする意志の表れに他ならない。ローマ人のための人工補装具として利用されるゲルマン人の身体、ヘルマンによればこれはローマ人による帝国主義的搾取の一つの表れであるという。[9]彼は説明を続ける。

アウグストゥスはその部隊とともにあらゆる土地で勝利を収めそれらを植民地としたのではないか。誰のために世界が創造されたというのか、ローマのためではないのか。アウグストゥスは像からは象牙をとり、ジャコウネコからは香油をとり、豹からは毛皮をとり、蚕からは絹をとるのではないのか。ここにいるドイツ人は何をもっているというのだろう。

［…］

ローマ人の目から見たドイツ人とは何なのか。

［…］

四本足で森を駆け回る獣さ！猟師が見つければ矢を射かけるだけの動物でそれ以上の価値はない。内臓を取り除かれ、毛皮をもっていかれるというわけだ！（II, 488）

ローマ人の考え方によれば、動物たちは人間に役立つ限りで存在価値が認められるにすぎない。したがって人間は、動物を含む自然が自らに有益なものとなるようにそれらを制御・支配してもよいのである。これはヨーロッパの自然観を伝統的に規定し続けてきた人間中心主義そのものであり、キリスト教の聖書解釈の影響を強く受け、また哲学的にはデカルトの機械論によって補強されることになる思考である。[10] 動物を、魂のない自動機械のようなものであると論じて人間と動物との差異を際立たせたデカルトは、[11]『方法序説』の第六部において、自然学的知識の獲得によって「われわれをいわば自然の主人にして所有者たらしめることができる」と述べている。[12]ヘルマンによれば、ローマ人にとっては野蛮なゲルマン人も動物たちと同様、支配され搾取される対象でしかない。こうしてローマの文明は自然を支配しようとする意志と結びつけられるのであるが、この結びつきは、劇中でローマ人達が自ら用いる動物のメタファーによっても強められる。[13] 例えば、ヴァールスから、ヘルマンについてどう考えるべきか尋ねられたヴェンティディウスは次のように答える。「やつはまさにドイツ人です。テベレ川の岸辺で草を食む去勢された一匹の羊の方が、やつが属する部族全員の分を合わせたよりも、うそいつわりという点では勝っているといわざるを得ませんな。」（II, 495）ヘルマンは素朴で愚かであると信じ込んでしまっているヴェンティディウスは、ゲルマン人を家畜に例える。家畜は、搾取する目的で人間によって制

御された自然に他ならないので、メタファーであるとはいえ、このヴェンティディウスの発言に、人間中心主義的自然観を読み取ることは不可能ではない。

ところが劇中で家畜のメタファーを用いるのはローマ人だけではない。第一幕第三場、ローマ軍の侵攻によって全ゲルマニアが危機に瀕しているというのに、二人のゲルマン部族長が、ある小さな領土の帰属をめぐって言い争いを始める。それを見たヴォルフ（Wolf）という名の別の族長が次のように嘆く。「ああ、ドイツよ、汝の牧場の囲いの中に狼が侵入してきたというのに、汝の牧人どもは一摑みの羊毛をめぐって争っているのだ。」（II, 451）ここで野獣に例えられるのはローマ人の方である。文脈からいえば「一摑みの羊毛」が表すのは、争いの原因となっている土地ということになる。しかしながらこのメタファーは、狼であるローマ人から、自らが養う羊としての民を守る牧人＝ゲルマンの族長たちというイメージをも連想させてしまう。[14]ゲルマンの民が、彼らの族長たちによって生存をコントロールされ、最終的には搾取されるべき家畜であるとするならば、この族長たちとローマ人との区別が曖昧になる。ゲルマンの族長達も、ゲルマン人を搾取の対象として見るローマ人達と同じ眼差しを、自らの民へと向けていることになるからである。さらに、このイメージの不穏さは、それを語っているのがヴォルフ（Wolf＝狼）という名の族長であるという点によって強められる。人間中心主義的自然観の中心にいる人間自体が狼で、外敵としてやってきた別の狼と対峙することになれば、敵味方の性質上の違いはさらに不明確になる。ヘルマンが策略によってローマ人を上回ってしまうという点と同様、メタファーのレベルでもローマ人とゲルマン人の区別は曖昧にされるのだ。両者の類似性や区別不可能性を指摘する研究は多いが、[15]文学研究者のバルバラ・フィンケンによれば、ここでクライストが描いているのは、区別されることのない暴君同士の戦いでしかなく、そこでは敵味方双方とも野獣化してしまう。[16]こうした説が展開されるのも納得はできる。しかしながら作品の結末で勝利を収めるのはゲルマン人なのであるから、ローマ人とゲルマン人の間には何らかの違いがなければならない。これを明らかにするのが、トゥスネルダによってヴェンティディウスへとけしかけられる牝熊をめぐる描写に他ならず、以下この描写を中心に分析を進める。野生のものを飼い馴らし武器として投入しているという点で、この熊もゲルマン人による自然の制御を表すものといえるが、他方、この自然に対峙する際にトゥスネルダが示す態度は際立った特質を示しており、またこの特質こそが、ロ

ーマ人を打ち破ることになるヘルマン自身の戦いと深く関わるものであるという点が明らかになるだろう。

II　失われる意識――熊とトゥスネルダ

トゥスネルダはヴェンティディウスに奪われた自らの髪が、試供品としてローマ女王の元に送られる予定のものであったということを知る（第四幕第九場）。ヘルマンが述べたローマ人によるゲルマン人の身体の道具化は事実であることが証明された。恋心を傷つけられ、裏切り者ヴェンティディウスへの復讐を決意したトゥスネルダは、逢引きと称して彼を呼び出し、牝熊をけしかける。

この熊を直接的に扱った研究としてはローベルト・ズーターとローラント・ボルガルツのものがある。権力表象という観点から熊の場面を論じるズーターによると、この熊によって表されているのは絶対王政とは異なる新たな権力行使の形である。[17]ズーターは熊が森に隠れて見えなくなってしまうという点に注目する。不可視である熊によって代表されることで権力は不気味さを増し、その行使に際してより効果的となる。またそれを表す記号が不可視であるがゆえに権力の所在自体も不明確となる。誰が行使しているのかが分からないような権力が問題となっている、というのがズーターの結論である。他方、舞台上での熊の動きを図式化しながら分析するボルガルツによれば、この熊の場面によって『ヘルマンの戦い』という作品が、聴衆の扇動を目的としたプロパガンダとしての政治的戯曲であると同時に、プロパガンダのメカニズムを聴衆に暴露してしまう政治的なるものについての戯曲でもあるということが証明されるのだという。[18]

熊の場面は第五幕第十五場から十九場にかけて描かれる。直前の第十四場では、夜、トイトブルクの森の入り口に待機しているヒェルスカ軍に対して、目前に迫る戦闘の計画が通知されたあと、スウェーヴェ軍からの角笛の合図が聞こえ、ヘルマンを先頭に全軍が出陣する。そして熊の場面が挿入され、その直後、第二十場で描かれているのは戦闘が終わったあとのスウェーヴェ族長マルボトの陣営である。スウェーヴェ軍の隊長がマルボトに戦いの勝敗が決するまでの経緯を報告する。トイトブルクの森はすでに昼になっている。したがって、この戯曲においてはトイトブルクの森でのヘルマンとヴァールスの戦いが直接描かれることはない。ボルガルツも指摘しているが、順番的には戯曲の題名ともなっている

戦闘が描かれるべき場所に、その代わりとしてトゥスネルダによる熊を使ったヴェンティディウス殺害が置かれているのだ。[19]そうだとすれば、この殺害は代理として、ヘルマンの戦いについて何らかのことを語っているのではないかという推定が成り立つ。上記の二つの研究では触れられていないこの点を明らかにするのが本稿の目的であり、以下、トゥスネルダによるヴェンティディウス殺害とヘルマンの戦いを比較していく。まず熊の場面である。第十五場を引用する。

（場景）トイトブルク。族長の幕舎の裏手にある庭。背景には鉄格子があり、岩山で囲まれた荒涼たる樫の森への入り口がある。

第十五場

（トゥスネルダとゲルトルートが登場）

トゥスネルダ　話すのだ、そなたが昨日の朝、幕舎の入り口でアウグストゥスの使節ヴェンティディウスと出会ったとき、あやつがなんといったのかを。どうだったのだ。

ゲルトルート　奥方様、あの者は恥ずかしそうな仕草で私の手をとり、その指に素早く指輪をはめながら、ゼウスのすべての子らに誓って、心から愛する人に夜密かに会えるようとりなしてもらいたいと懇願するのでございます。どこで、と私がたずねますと、岩山に囲まれ、民衆がよく野牛の狩りを楽しんでいるこの公園を提案してまいりました。ここならば、レーテ川のほとりのように静かで、煩わしい人目を気にする必要もない、自分と恋人をめぐって競うのは月のみである、と申すのでございます。

トゥスネルダ　あやつに私の答えは伝えたのか。

ゲルトルート　今日、月が沈むころ雄鶏が朝を告げる前に、そなたの言う樫の森をたずねる気があれば、そなたに熱い思いをお寄せの奥方様が、入口のすぐ右手で迎えてくださるであろう、こう伝えましてございます。

トゥスネルダ　それで、ヘルマンが先ごろ森でとらえた牝熊については、動物見張番のヒルデリヒとはすでに話はついているのか。

ゲルトルート　仰せの通りにしてございます。ヒルデリヒはもうそれを連れてこちらへまいります！―　でも奥方様、野蛮人のする復讐などお考

えにならぬよう、ここにひれ伏してお願い申し上げます。私が心配しておりますのはヴェンティディウスのことではございません、奥方様ご自身のことでございます。もしそのような行為をなされば、後悔と苦悩から崩れ落ちておしまいになるでしょう。

トゥスネルダ　　かまうな！―あやつは私を牝熊にしたのだ！私は再びアルミニウスにふさわしいものとなりたいのだ。（II, 539-540）

ヘルマンの妻としてふさわしくありたいという言葉通りに、ここではトゥスネルダが夫の例にならって策略をめぐらし敵を欺く。侍女がうろたえているのに対して、トゥスネルダは冷静である。[20]まずこの場面で興味深いのは場景の設定であろう。ヘルマンの幕舎の庭が舞台と一致し、今そこにトゥスネルダとゲルトルートがいる。背景には鉄格子があってその後ろに森が広がっているという設定なので、この森は舞台裏ということになる。そして鉄格子と岩山で囲まれたこの森が公園（Park）と呼ばれ、民衆が狩りを楽しむ場所でもあるとされる。ボルガルツも指摘している通り、公園は鉄格子で境界付けられているとはいえ、自然と文化が融合した疑似的自然空間であるといえる。[21]人間が自然に介入していて動物も狩りの対象として殺されるわけだが、この介入はローマ的・人間中心主義的な自然支配とは異質なものである。ローマ的自然観に対応するのは幾何学的でシンメトリックな庭園であるが、このヒェルスカの公園はむしろ近代以降増えていったピクチャレスク趣味の英国式庭園に近いものといえるだろう。ただし英国式庭園の流行も、進行する都市化と森の減少に対する反発の表れであったから、人間による自然支配なしには考えられないものである。[22]

さらにこの公園で狩りの対象となるのが野牛（Ur）であるが、アーデルングの辞典（1808）には野牛と同義語であるオーロックス（Auerochs）について次のような記述がある。[23]「ローマ人たちがこの動物を知っていたのは、その隣人であるガリア人と南部ドイツ人を通してのみであり、その名前も彼らから借りてきたものであった。［…］ドイツがまだ森で覆われていた頃、多くのオーロックスが生息していた。［…］ドイツにより多くの人が住むようになると、この動物達も他のものと同様に姿を消した。」[24]オーロックスがローマ人にとってゲルマン人と深く結びつくものであったという指摘以上に本稿の議論にとって重要なのは、[25]森の減少と人口増加への言及である。人間たちの進出による森の減少によ

って姿を消したオーロックスは、文明化による自然の荒廃というイメージを喚起するのである。またこの動物は『ヘルマンの戦い』においてすでに登場していた。劇の冒頭、ヘルマンとトゥスネルダは、同じ公園でヴェンティディウスとともに狩りに興じているが、この歓待は相手を油断させるための偽装である。その際、仕留めたかに見えた手負いのオーロックスに襲われたトゥスネルダを間一髪のところでヴェンティディウスが救うという事件が起こる。妻の恩人であるヴェンティディウスを称えるヘルマンだが、これも本心からではない。オーロックスが突進してきたとしてもトゥスネルダは木に登ることができたわけで、命の危険などなかったのである（第一幕第二場）。ここでのオーロックスはヘルマンとトゥスネルダの制御下に置かれ、危険性が取り除かれた自然なのだ。劇中における「公園」は、自然空間であるとはいえ、ゲルマン人の管理下に置かれ制御されている。そこに住む動物達も同様である。

そしてこの空間に今回投入されるのがヘルマンによって捕らえられた牝熊だが、これもすでに手なずけられており、動物番のヒルデリヒによると、彼がそばにいれば「若い猫のようにおとなしい」。（II, 541）しかしこの飼い馴らされた熊にここではさらに人為的な操作が加えられる。ヒルデリヒの台詞を引用する。「熊には、命じられた通り、もう十二時間何も食わせちゃいません。こいつをからかおうなんぞという気をおこそうものなら、あなたに残忍な冗談をしでかすことでしょう。（彼は牝熊を公園の中に入れ鍵をかける）」（II, 541）空腹にさせておくように命じたのはトゥスネルダである。飼い馴らされた熊に人為的に攻撃性を付与しているという点でこの熊は制御された自然そのものといえる。この生物兵器が、疑似的自然空間に投入され自然が演出されるのである。文明に対して復讐する自然は人為的に生み出され演出されたものでしかないのだ。[26]やはり自然を積極的に制御しているという点で、トゥスネルダとローマ人との違いは未だ明確ではない。

このあと、ヴェンティディウスが登場し、トゥスネルダはゲルトルートに彼を公園に入れるように命じるが、うろたえるばかりのゲルトルートは動こうとせず、結果、トゥスネルダが自ら彼女を装い、敵を公園の中へと導き鍵をかける。ヴェンティディウスの悲鳴が響き渡る中、ゲルトルートは彼を救出するためにヒルデリヒとともにトゥスネルダから鍵を奪い取ろうとする。

ゲルトルート　　奥方様より鍵を奪うのじゃ、ヒルデリヒ！
（二人はなんとか彼女から鍵をもぎ取ろうとする）
ヴェンティディウス　　ああ！この悲惨！痛い！おお、トゥスネルダ！
トゥスネルダ　　彼女に言うのだ、ヴェンティディウス、そなたを愛しているとな。さすれば彼女はおとなしくなりそなたに髪を贈ることだろう！
（彼女は鍵を放り投げ、そして気絶する）
ゲルトルート　　恐ろしいお方！―永遠なる天の神々よ！気を失って私の腕の中に倒れてしまわれた！（II, 545）

熊を目の前にしたヴェンティディウスが初めてトゥスネルダの名前を口にしたこの瞬間、トゥスネルダと熊との同化が完了し、その直後トゥスネルダは鍵を放り投げた上で意識を失う。トゥスネルダの名を口にしたときヴェンティディウスはまだ生きているのだから、この時点では救出の可能性は残されていた。この可能性を完全に絶ったのがトゥスネルダの気絶である。ゲルトルートの抵抗という予想外の事態を彼女はこうして乗り切る。このあと騒ぎを聞いて駆け付けたヒェルスカ人がヒルデリヒとともに扉を破って公園に侵入するが、時すでに遅く、牝熊とともに遺体となったヴェンティディウスが引き出されてくる。

ここで牝熊が発現する自然の力は理性的な計算に基づく制御によって人為的に生み出されていたわけだが、最後の最後に気絶という形で、トゥスネルダは自ら生み出した自然に没入することによって、ゲルトルートの抵抗をかわす。気絶による自然との同化は同時に自然を制御する力を失うことでもある。[27]そして逆説的ではあるが、このコントロールの喪失があったからこそ求めていた結果がもたらされたのだ。彼女の復讐はこうして完遂される。

III　失われる自制心――パルチザンとヘルマン

ではヘルマンの戦いはどうか。すでに述べた通り、これについては熊の場面の直後に間接的な形で語られる。スウェーヴェ軍の隊長がマルボトに戦いの結果を次のように報告する。

ご承知の通り、日が昇るのと同時に、ヘルマン殿の作戦通り、敵の軍団目が

けて進軍いたしました。ところがそこにはすでに、［…］戦闘が荒れ狂っておりました。ドイツ人たちが立ち上がり、雄叫びをあげながらローマ人の鉄鎖を引きちぎっていたのです。しかし手負いの猪のようにすばやく襲いかかってくるヴァールス相手に、彼らは今にも敗れそうな様子でした。そのときブルーンオルトが殿［マルボト］の軍とともに救援に駆けつけ、自由のための戦いの勝敗は決したというわけです。（II, 546）

したがってあらかじめ立てられた作戦計画はここでは機能しなかった。問題になっているのは、作戦計画と関係なく突如として戦場に現れ、戦闘において決定的な役割を果たす民衆、すなわちパルチザンであるが、この民衆武装蜂起はヘルマンのプロパガンダによってあらかじめ用意されていたものである。これより前の第四幕において、ゲルマン人の少女がローマ人たちによって凌辱された上、自らの父親によって刺殺されるという事件を、ヘルマンはむしろ好機ととらえ、少女の身体をローマによって蹂躙される祖国のシンボルへと仕立て上げていたのだ。この場面で娘の父親に対しヘルマンは次のように語る。

ヘルマン　さあよくきけ、そして何も答えるでない。―冷酷なる父よ、立て、そして従兄弟たちとともに凌辱された処女をそなたの家の片隅へと運ぶのだ！ゲルマン人は十五の部族からなる。鋭い剣で彼女の身体を十五に切り刻み、十五人の急使とともにそれを、ゲルマニアの十五の部族へと送るのだ。そのための十五頭の馬はわしがさずけよう。その身体はそなたの復讐のために、ドイツにおいて、生を持たぬ自然力に至るまですべてのものを立ち上がらせるであろう、暴風は、ごうごうと音をたてながら森を通り抜け、蜂起だ！と叫び、海は、大陸の突出部をたたきつけながら、自由を！と吠えるであろう。

民衆　蜂起だ！復讐だ！自由だ！（II, 511）

このように民衆武装蜂起は、ヘルマンによる計算づくのプロパガンダによってあらかじめ準備されていたのだが、ここでは民衆が発現する力が自然力に例えられている。メタファーによる表現であるとはいえ、民衆武装蜂起はトゥスネルダの熊同様、人為的に生み出された自然なのだ。そしてこの自然の力が実際の戦場に

おいては、計算に基づく作戦計画とは矛盾する形で発現する。すでに述べた通り、作戦計画は熊の場面の直前、第十四場において出陣前のヒェルスカ軍に伝えられる。この場面において、戦闘準備が整ったことをマルボト軍に知らせるための狼煙を上げるよう命じたヘルマンは、気持ちを高める歌を聞かせるよう吟唱詩人たちに要求する。すると遠くから歌声が響き始める。

吟唱詩人たちの合唱　（遠くから）あのよそ者が侵入してきたその日より、われらは人として苦しんだ。あざけりとともにわれらに送られた最初の苦難に対し、復讐はしなかった。神々の教えに従い、何年もの間、許した。しかしついに軛の重みに耐えかねて、それを振り落とさんとする。

（ヘルマンは手を支えにしながら樫の幹に身をもたせかけている。―厳かな中断―互いにひそかに話し合う指揮官たち）

ヴィンフリート　（彼に近づき）殿、どうかお許しを！時間が迫っております。戦の計画をわれわれに語ってはくださらぬか―

ヘルマン　（向きをかえて）すぐにいく！―兄弟よ、そなたわしに代わって話してはくれぬか、頼む。

（激しく心揺さぶられ、再び樫の木にもたれかかる）

一人の隊長　何と仰せです。

別の隊長　何事です。

ヴィンフリート　かまうでない。―落ち着かれることだろう。（Er wird sich fassen.）諸君、集まるのだ。私がそなたらに作戦計画を打ち明ける。（II, 539）

こうしてヴィンフリートが作戦計画の説明を始めるが、ヘルマンはその間も歌に聞き入ってしまっており、平静さを失った（fassungslos）状態から抜け出せない。ヴィンフリートの説明が終わり、マルボト軍からの返答の角笛が響き渡った瞬間になってようやく彼は我に返る。吟唱詩人たちは武装蜂起へと立ち上がる民衆について歌っているので、ヘルマンは自制心を失っている間、民衆と同化してしまっているとみなせる。トゥスネルダ同様、ヘルマンも自らが人為的に作り出した自然に没入してしまうのだ。その結果、作戦計画は意識の外へと置かれてし

まうのだが、[28]これは象徴的である。なぜならば、ヘルマンが同化してしまう民衆こそ、戦場において作戦計画を無視する形で戦うことになるからである。パルチザンが作戦計画に矛盾する存在であるという点は、同時代の戦争理論も強調している。例えばクラウゼヴィッツは民衆武装蜂起について次のように述べる。

> ［…］［民衆による戦争］は、人間が風や雨を停止させることができないように、単なる兵力でもってしては鎮めることのできない測りがたく抑制不可能な要素であるとまでは言わないとしても［…］、次のことは認めなければならない。武装した農民達を、家畜の群れのように相並んで静止し、通常は前方へ進む一兵団のように追い立てていくことはできない。農民達は追い立てられれば、人為的な計画を必要とすることなく四散していくからである。[29]

機動性と遊撃性にこそその本質があるパルチザンの動きを計画によって事前に把捉（fassen）することはできないし、またしてはならない。把捉された瞬間その利点は失われてしまうからである。クラウゼヴィッツ自身は懐疑的であるとはいえ、パルチザンが自然現象に例えられるのも、この予測不可能性ゆえのことである。[30]クライストの戯曲はまさにこの点を描いているのであり、自制心を失った（fassungslos）ヘルマンが暗示しているのは作戦計画の無効性に他ならない。実際、トイトブルクの森では、作戦計画に反して行動するパルチザンが力を発揮する。

理性的な計算によって人為的に生み出された自然は、その力を発現する段階にいたって人間による制御から解放されなければならない。トゥスネルダは気絶によって、ヘルマンは自制心の喪失によって、生み出された自然に没入・同化することでこれをなす。戦場という、予測不可能性が支配する領域において成功を収めるためには、[31]この無意識的に発動される能力が不可欠なのである。この点においてトゥスネルダとヘルマンはローマ人からはっきりと区別されるのである。

註

1　作品の成立過程については以下参照。Vgl. Ilse-Marie Barth/Hinrich C. Seeba: Kommentarteil. In: Heinrich von Kleist: Sämtliche Werke und Briefe in vier Bänden. Hrsg. von Ilse-Marie Barth/Klaus Müller-Salget/Walter Müller-Seidel/Hinrich C. Seeba. Frankfurt a.

M. 1987-1997, Bd. II, S. 1058-1146, hier S. 1070-1076.

2 Vgl. Hermann F. Weiss: Funde und Studien zu Heinrich von Kleist. Tübingen 1984, S. 187-234.

3 Vgl. z. B. Klaus Müller-Salget: Art. Die Herrmannsschlacht. In: Ingo Breuer (Hrsg.): Kleist-Handbuch. Leben – Werk – Wirkung. Stuttgart/Weimar 2009, S. 76-79, hier S. 76-77.

4 Vgl. Gerhard Schulz: Die deutsche Literatur zwischen Französischer Revolution und Restauration. Zweiter Teil. Das Zeitalter der Napoleonischen Kriege und der Restauration 1806-1830. München 1989, S. 13-76.

5 Heinrich von Kleist: Die Herrmannsschlacht. In: ders.: Sämtliche Werke und Briefe (Anm. 1), Bd. II, S. 447-554, hier S. 459. 以下、クライスト作品からの引用は本版に拠り、括弧内に巻数（ローマ数字）、頁数（アラビア数字）を本文中に記す。日本語訳は筆者によるもの。

6 この点についての先駆的な研究としては以下参照。Vgl. Wolf Kittler: Die Geburt des Partisanen aus dem Geist der Poesie. Heinrich von Kleist und die Strategie der Befreiungskriege. Freiburg i. Br. 1987, S. 218-255. パルチザン闘争という観点から『ヘルマンの戦い』を分析したものとしては他にも以下がある。Vgl. Kanichiro Omiya: Eine Genealogie des (modernen) Kriegs-Diskurses. Heinrich von Kleists »Die Herrmannsschlacht«. In: Neue Beiträge zur Germanistik 120, Bd. 3-3 (2004), S. 128-143; Niels Werber: Die Geopolitik der Literatur. Eine Vermessung der medialen Weltraumordnung. München 2007, S. 45-71.

7 そのような解釈の例としては以下参照。Vgl. Peter Michelsen: »Wehe, mein Vaterland, Dir!« Heinrichs von Kleist »Die Hermannsschlacht«. In: Kleist-Jahrbuch 1987, S. 115-136, hier S. 119-120.

8 第一幕第三場でヘルマンは他の族長達に次のように述べている。「要するに、すでに一度伝えた通り、そなたらが妻と子をまとめてヴェーザー川の右岸に送り、所有する金や銀でできた食器類を溶かし、宝石類を売却するか質入れし、自身の田畑を荒らし、家畜をたたき殺し、町を焼き払う気があるのならば、私はそなたらと手を組もう。」（II, 461）

9 『ヘルマンの戦い』における帝国主義の問題については以下も参照。Vgl. Christine Künzel: Der Raub einer Locke oder Lektionen über die, ›Verwertbarkeit‹ des Menschen in Kleists »Herrmannsschlacht«. In: Ricarda Schmidt/Seán Allan/Steven Howe (Hrsg.): Heinrich von Kleist. Konstruktive und destruktive Funktionen von Gewalt. Würzburg 2012, S. 117-131.

10 この点についてはキース・トマス（山内昶監訳）『人間と自然界 —— 近代イギリスにおける自然観の変遷』（法政大学出版局）1989、13-42頁参照。トマスによれば、人間中心主義という点で「デカルト主義はすぐれて宗教擁護の哲学とみなされてい

たので、逆にこの思想の反対者は、［当時］神学上の要注意人物と疑われかねなかった」。（同書、39頁）

11 デカルト（谷川多佳子訳）『方法序説』（岩波文庫）2020、57-79頁参照。

12 同書、82頁。

13 メタファーに注目しながら『ヘルマンの戦い』を分析した研究としては以下参照。Vgl. Stefan Börnchen: Translatio imperii. Politische Formeln und hybride Metaphern in Heinrich von Kleists »Hermannsschlacht«. In: Kleist-Jahrbuch 2005, S. 267-284.

14 Vgl. ebd., S. 275-277.

15 例えば以下参照。Vgl. Michelsen: »Wehe, mein Vaterland, Dir!« (Anm. 7), S. 119-123; Eva Horn: Herrmanns ›Lektionen‹. Strategische Führung in Kleists »Herrmannsschlacht«. In: Kleist-Jahrbuch 2011, S. 66-90, hier S. 73, 75.

16 Vgl. Barbara Vinken: Bestien. Kleist und die Deutschen. Berlin 2011.

17 Vgl. Robert Suter: Kleists Hetztheater. Eine Genealogie der Bärin. In: Martina Wagner-Egelhaaf (Hrsg.): Hermanns Schlachten. Zur Literaturgeschichte eines nationalen Mythos. Bielefeld 2008, S. 307-321. 権力表象としての熊についてはミシェル・パストゥロー（平野隆文訳）『熊の歴史――「百獣の王」にみる西洋精神史』（筑摩書房）2014参照。本書はズーターの議論の出発点ともなっている。

18 Vgl. Roland Borgards: Off Cage. Kleists Herrmannsbärin. In: Andrea Allerkamp/Matthias Preuss/Sebastian Schönbeck (Hrsg.): Unarten. Kleist und das Gesetz der Gattung. Bielefeld 2019, S. 355-369.

19 Vgl. ebd., S. 365-366.

20 この点についてはローレンス・ライアンも指摘している。Vgl. Lawrence Ryan: Die ›vaterländische Umkehr‹ in der »Hermannsschlacht«. In: Walter Hinderer (Hrsg.): Kleists Dramen. Neue Interpretationen. Stuttgart 1981, S. 188-212, hier S. 206.

21 Vgl. Borgards: Off Cage (Anm. 18), S. 359-360.

22 近代における庭園様式の変遷については、トマス『人間と自然界』（註10）、384-405頁参照。

23 実際、クライストの『ヘルマンの戦い』ではオーロックス（Auerochs）という語も使用されている。Vgl. II, 452.

24 Johann Christoph Adelung: Grammatisch-kritisches Wörterbuch der hochdeutschen Mundart. Wien 1808, 1. Teil, Sp. 467.

25 同様の指摘は当時ヨーロッパで広く読まれていたビュフォンの『自然誌』にもみられる。Vgl. Herrn von Buffons Naturgeschichte der vierfüßigen Thiere. Brünn 1786, 9. Bd., S. 172.

26 したがってローマ人へのゲルマン人の抵抗を、文明に対する単なる自然の反乱と読むライアンは両者の関係性を単純化してしまっている。Vgl. Ryan: Die ›vaterländische Umkehr‹ (Anm. 20), S. 203-206.

27 コントロールを失うという点はズーターも指摘している。Vgl. Suter: Kleists Hetztheater (Anm. 17), S. 308-309.

28 このモティーフはクライストの次の戯曲『ホンブルク公子』で再び取り上げられることになる。この点はミヒェルゼンも指摘している。Vgl. Michelsen: »Wehe, mein Vaterland, Dir!« (Anm. 7), S. 132, Anm. 37.

29 Carl von Clausewitz: Vom Kriege. Hrsg. von Werner Hahlweg. Bonn 1973, S. 802.

30 似たような自然現象のメタファーは、革命フランスの群衆についての諸言説においても確認できる。Vgl. Michael Gamper: Masse lesen, Masse schreiben. Eine Diskurs- und Imaginationsgeschichte der Menschenmenge 1765-1930. München 2007, S. 125-211.

31 同時代の戦争理論において予測不可能性の問題への関心が高まっていたという点については以下参照。Vgl. Hartmut Böhme: Krieg und Zufall. Die Transformation der Kriegskunst bei Carl von Clausewitz. In: Marco Formisano/Hartmut Böhme (Hrsg.): War in Words. Transformations of War from Antiquity to Clausewitz. Berlin/New York 2011, S. 391-413.